

◆ 中央図書館の催し物 ◆

中央図書館では、企画展を開催しています。ぜひ期間中に図書館に足をお運びください。

- ▶ 場所：台東区立中央図書館(台東区西浅草3-25-16) 2階 郷土・資料調査室内 ゆかりの文学コーナー
- ▶ 開館時間：月～土曜日 午前9時～午後8時 日曜日・祝日 午前9時～午後5時
- ▶ 休館日：毎月第3木曜日
- ▶ お問い合わせ先：中央図書館郷土担当 ☎5246-5911

郷土・資料調査室 企画展 「日記が語る台東区6 江戸の旅日記を読む」

「日記が語る台東区」シリーズその6として江戸時代の旅日記をとりあげます。

江戸時代、多くの人びとが全国から台東区の上野・浅草という観光地を訪れました。また、江戸に住む人びとも、花や功德を求めて寺社をめぐる小旅行を行っていました。

本企画展では、江戸時代の旅に注目し、彼らが台東区の地域をどのように旅したのかを旅日記や地誌から明らかにします。

- ▶ 期間：6月21日(金曜日)～9月16日(月曜日・祝日)

●企画展に関連して、専門員によるイベントも開催いたします。

●専門員によるギャラリー・トーク

- ▶ 内容：展示品の見どころを直接展示会場で解説。
- ▶ 日時：8月18日(日曜日) 午後4時15分～4時45分(予定)
- ▶ 会場：台東区立中央図書館 2階郷土・資料調査室
- ▶ 定員：先着20名
- ▶ 申込：事前に直接来館の上申込み。または、電話での申込み。

●専門員によるスライド・トーク

- ▶ 内容：展示品の見どころをスライドで解説。
- ▶ 日時：9月15日(日曜日) 午後2時～3時
- ▶ 会場：台東区生涯学習センター 504教育研修室
- ▶ 定員：先着50名
- ▶ 申込：不要



郷土・資料調査室 企画展 「浅草仲見世」

日本で最も古い商店街のひとつである浅草仲見世は、浅草寺とともに繁栄し、台東区に賑わいをもたらしてきました。現在では東側に54店、西側に35店の合計89店の店舗が営業しており、参道を行く人を楽しませています。

本企画展では、台東区立中央図書館で所蔵している浮世絵や地図、写真等の貴重資料から仲見世の歴史をご紹介します。

- ▶ 期間：9月20日(金曜日)～12月15日(日曜日)

●企画展に関連して、イベントも開催いたします。

●トーク・イベント

- ▶ 内容：浅草に精通した講師がそれぞれの視点から仲見世を語ります。
- ▶ 日時：①10月6日(日曜日) 午後2時～3時30分
②12月8日(日曜日) 午後2時～3時30分
- ▶ 講師：①塩入亮乗氏(浅草寺法善院住職)
②富士滋美氏(仲見世商店街振興組合理事長・浅草観光連盟会長)
- ▶ 会場：台東区生涯学習センター301研修室
- ▶ 定員：90名
- ▶ 申込：往復はがき(1人1枚)に「トークイベント」と記載し、開催日時・氏名・住所・電話番号をご記入のうえ、上記へ送付。または、台東区立図書館ホームページから申込み。

●専門員によるギャラリー・トーク

- ▶ 内容：展示の見どころを展示会場で解説。
 - ▶ 日時：11月10日(日曜日) 午後4時15分～4時45分
 - ▶ 会場：台東区立中央図書館 2階郷土・資料調査室
 - ▶ 定員：先着20名
 - ▶ 申込：事前に直接来館の上申込み。または、電話での申込み。
- ※詳細は台東区立図書館ホームページでご確認ください。



懐かしの写真 連載

『ほおずき市』 昭和48.7.9



その日にお参りすれば四万六千日分、およそ人の一生分に相当するご利益が得られるという功德日の7月9日、10日に、浅草寺境内に約100軒のほおずきを売る露店が立ち並びます。その実を水で丸飲みすれば病気が治るといふ民間信仰のあったほおずき。鉢に添えられた風鈴が涼をさそい、江戸の夏の風物詩となっています。撮影 高相嘉男氏

※今回の写真は、中央図書館で閲覧できるほか中央図書館ホームページでも公開しています。ぜひご覧ください。

二〇一六年(平成二十八年)七月十七日、日本に大変嬉しいニュースが届きました。特に台東区の人たちの喜びはひとしおでした。国立西洋美術館を含む七か国十七資産で構成される「ル・コルビュジエの建築作品」が世界文化遺産に登録されたのです。

皆さんは、世界遺産に登録された上野公園にある国立西洋美術館を知っていますか。正門を入るとすぐ、目に付くのが、有名な彫刻家「ロタン」の「考える人」や「地獄の門」「カレールの市民」の彫刻です。美術館の中に入ると、モネやミレー、ルノワールなど、世界的に有名な人の作品がたくさん展示されています。このような作品が、どうしてこの美術館に揃っているのでしょうか。また、どうして世界的に有名な建築家が設計したのでしょうか。それは、一人の日本人の熱い思いと長い時間をかけた活動、そして多くの人の努力があったからなのです。

これらの美術品は、一人の日本人が買集めたものでした。その人の名前は、松方幸次郎といいます。幸次郎は、川崎造船所(現川崎重工業株式会社)という大きな会社の経営者で、日本でも一、二を争う資産家でした。幸次郎は、美術品の収集家で、芸術の価値を理解し作品を大切にしていました。特に美術にくわしかった訳ではありません。自分で絵を描く訳でもなく、趣味が美術鑑賞でもありません。ではどうして、多額のお金を使って美術品を集めたのでしょうか。

それは幸次郎の生き方に関係があります。幸次郎は一八六五年(慶応元年)に鹿児島で生まれます。東京帝国大学(現在の東京大学)を中退し、一八九〇年(明治二十三年)までの六年間アメリカに留学しました。留学がとても珍しく困難だった時代に、六年という長い間、海外で勉強をしたのです。留学の最後の頃にはヨーロッパを巡っています。その後、川崎造船所という父親の友人の会社で社長になり、経営手腕を発揮して、日本でトップクラスの会社に成長させました。

幸次郎は仕事で海外に出かけることが多かったため、欧米の人たちが文化を大切にしているのを感じて、人間にとって文化がとても大事なものであることに気が付きました。そして、一人の日本人として、欧米と同じように日本の文化

を向上させたいと強く願うようになった。そのために必要だと考えたのが美術品でした。日本の文化を担っていく美術を学ぶ学生たちは、留学にお金がかかるため、欧米に出かけて有名な画家たちの作品に触れることができません。そこで、幸次郎は、まず有名な美術家たちの作品をたくさん購入し、それを日本で展示して学生たちに見せ、文化の向上に役立てたいと考えたのです。

また、多くの美術品を購入したのは画学生のためだけではありませんでした。日本の国民に、本物の芸術を見せたいと思ったからでした。社会全体が貧しい時代だからこそ、国民が教養として美術品にふれ、高い文化をもつてほしいと願ったからだったのです。その後、資産を持った幸次郎は、自分が日本という国にできることは何かを考え、美術品の購入に踏み切ったのです。

こうして集めた美術品の中に、八千点を超える浮世絵があります。浮世絵は日本では大衆の安い美術品でした。輸出する陶器の包み紙として使われていたのが、西洋人の眼に触れて、とても素晴らしい美術品だと、高い評価を得たのでした。そしてゴッホ、セザンヌ、マネをはじめとした画家たちの作品に強い影響を与えたのです。幸次郎は、浮世絵の芸術としての価値を海外の芸術家たちから教えられ、国外に流出した浮世絵を買い戻したのです。

上野の世界遺産はこの人から始まる

— 松方幸次郎 — 前編

連載 子供に聞かせたい、こんな話 その28

こころざし高く

【出典】「火輪の海 松方幸次郎とその時代 復刻版(新装)」 神戸新聞社二〇〇七年

【監修】 国立西洋美術館 ※出典を参考文献として文章を構成しています。中学校一～三年生用「こころざし」教育副読本に掲載

お問い合わせ先：教育支援館 ☎5246-5921

「松方コレクション展」開催中

「国立西洋美術館開館六十周年記念「コレクション展」が開催されています。ぜひ足をお運びください。

【日時】六月十一日(火曜日)～九月二十三日(月曜日・祝日)

【会場】国立西洋美術館

詳細は国立西洋美術館公式ホームページをご覧ください。